

# みなさんは、同和問題をご存知ですか？



これから私がみなさんを、同和問題の理解と解決のために、少しでもお役に立てるようご案内します。

同和問題は、生まれた場所(被差別部落)や、その出身というだけで差別される、根拠もなく著しく不合理な部落差別問題をいいます。

私たちの社会にある、人種の違いによる差別、宗教の違いによる差別、性の違いによる差別、障害者差別などは世界各地で見受けられる差別です。このような差別ももちろん許されませんが、同和問題は、日本人がとらわれやすい死や血などに関するケガレ意識のほか、家意識、世間体などが根底にある、簡単には拭いさることのできない日本固有の差別なのです。

## 「同和問題は どうして起こったのでしょうか？」



史料では、すでに鎌倉時代中期の文獻に部落差別の原型が記述されています。その後、16世紀末に豊臣秀吉は、農民が田畑から離れることを禁じるために、武士と町民・農民とを分けた身分制度を作りました。この身分制度をさらに進めるため、徳川幕府は歴史的、社会的な経緯で差別されていた一部の人々を、著しく低い身分として固定し、職業や住むところを制限しました。

こうして被差別部落の形成が進み、その多くが生活や暮らしが低いレベルにおかれて

いったといわれています。この差別されていた一部の人々は、占術など神秘的な技能を持つ職人や芸人、そして、生き物の死にかかわる職業に携わっていました。そして、科学が未発達であった当時、多くの人を抱いていた「ケガレ意識」の対象として見られてきました。神秘的であるが故に、畏怖の念から「ケガレ意識」の目で見られてしまったのでしょうか。

観阿弥(かんあみ)や世阿弥(ぜあみ)が完成させた能をはじめ、歌舞伎や人形浄瑠璃などの芸能、寺社の庭師、武器や馬具、太鼓などの革製品の生産、竹細工にいたるまで、現在日本の伝統文化といわれるものの多くは、当時の被差別民衆が担ってきたものです。

1871(明治4)年の解放令によって、こうした差別の身分制度は廃止されました。しかし、被差別部落が長年おかれてきた厳しい状況は改善されずに形式的なものであったため、周囲からの偏見や差別はそのまま放置されました。

明治以降の資本主義化による制度や産業の変革により、被差別民が担ってきた皮革産業などの特権は資本家に奪われ、被差別部落の生活や実態はより厳しいものになっていきました。

1922(大正11)年の全国水平社の結成は、被差別部落の人達が不当な差別を自らの運動によって解消しようと立ち上がった出来事でした。

現在、行政、企業、宗教団体、民間団体等、多

くの人や団体が部落差別問題の解消に取り組んでいます。

しかし、今日に至っても、同和問題は結婚や就職など日々の暮らしの中で差別事件として、早急に解決が必要な現実の社会問題となって現れています。

※権力の関与の程度や成立の時期は現在も研究者の間で議論が進められています。

## 「差別は、差別される人を傷つけるだけでなく、差別する人をも不幸にするという事例をご紹介します」



どこにでもいる若い男女がめぐり合いました。3年の交際を経て結婚を決意した二人でしたが、男性が女性の両親に被差別部落出身であることを話したところ、二人の結婚に対して猛反対を受けてしまいました。2年の歳月をかけて二人は女性の親戚を回って理解を求め、両親に再度話しましたが、最後まで賛成を得ることはできませんでした。結婚した二人の間には子どもも生まれ、男性の両親はそんな二人を暖かく見守ってくれました。

一方、女性の両親とは、その後まったく交際がなく、孫達も母方の祖父母に会ったことがありません。二人の結婚を認めないまま、女性の母親は数年前に亡くなりました。

結婚を認めてもらえなかった二人、祖父母に存在すら認められない孫、実の娘や孫にも会えないで亡くなった母親…

差別は、差別される人を傷つけるだけでなく、差別する人をも不幸にするのです。

結婚差別はこの事例だけでなく、現在でもさまざまところで起こっています。

## 「最近でも東京で差別事件があるの？」



2003(平成15)年5月、東京都中央卸売市場食肉市場で働く人々を誹謗・中傷する差別はがきを発端に、約400通の差別はがき・手紙が都内を中心に被差別部落出身者やその関係者に送りつけられる「連続大量差別はがき事件」が発生しました。犯人は逮捕され、2005(平成17)年7月に懲役2年の実刑判決が確定しましたが、その後も食肉市場あてに、そこで働く人を侮辱する悪質な差別はがき等が郵送される差別事件はなくなってはいません。

また、公共施設など大勢の人の目に触れやすいところに、被差別部落出身者や外国人を誹謗・中傷・脅迫する差別落書きが後を絶ちません。